実践報告

保育者養成課程学生の運動指導における困難感

― 模擬授業を目的とした指導案作成を通して ―

Difficulties When Exercise Instruction of a Training School for Nursery Teachers

― Preparation of Teaching Plans for the Purpose of Simulating Classes ―

次世代教育学部こども発達学科
趙　秋華
CHO, Chuhwa
Department of Early Childhood Development
Faculty of Education for Future Generations

次世代教育学部こども発達学科
川瀬　雅
KAWASE, Miyabi
Department of Early Childhood Development
Faculty of Education for Future Generations

Ⅰ．背景

１．幼児教育と指導不安に関する考察

保育者養成課程[i]において，幼稚園教諭免許状および保育士資格を取得するためには，そこで定められている科目を修得し，現場での実習経験を積むことが求められている。保育者養成校において，実際の指導場面を想定した模擬保育・授業によって実践活動を経験することは，保育実践力を高めるために重要であると考えられており，実習を経験する前に指導経験を積んでいる。この模擬保育・授業を行うにあたって，まずは子どものためになされる教育であることを想定して指導案を作成し，その内容に沿って活動を展開させる。その際には学生を子どもに見立てることで模擬保育・授業が行われているのが一般的だろう。しかし実際に子どもを持たない，あるいは子どもとの関りが少なく対象を十分に理解していない学生が子どもの言動を想定し，上記で示したような模擬指導・授業を実践し，保育実践力を身に付けることは極めて困難であるというのが実情である。

学生が抱えるこのような「困難感」は，「指導不安」に置き換えることができる。大野木・宮川（1996）は，教職課程履修の大学生にごく一般的にみられる心配・不安が，少なくとも「授業実践力」「児童・生徒関係」「体調」「身だしなみ」の４つの次元から構成されると報告している。「授業実践力」に関する心配・不安とは教員の授業構成スキルである対象への理解や，わかりやすい授業を実践できる能力に由来している。また，この報告によると，この４尺度は教育実習後には有意に減少している。

また，室井・桐川（2018）がA短期大学の保育者養成課程にて行った調査では，現場に出る前の学生にとって「子どもの姿」や「保育の展開」を想起し記述することが困難であることを報告している。

しかし，こうした「困難感」や「不安感」は学生に限ったことではない。現在教育現場に立つ教員が経験のないことを指導しなくてはならないことに起因する不安を抱えている可能性について山口ら（2017）は報告している。幼児教育においても，現在教育現場に立つ教員が上記してきたような指導不安を抱えている現状がある[ii]。

２．幼児教育で求められる運動指導のあり方に関する考察

幼児教育においては，幼児の運動能力の低下が指摘されるようになったことを受けて，文部科学省は平成24年３月に「幼児期運動指針」を策定した。これにより，全国の幼児教育の現場では指針に沿った運動に取り組んでいる。幼児期運動指針では，幼児期の運動活動は生涯にわたって運動やスポーツを実践していくことの基盤となることを訴え，幼児に多様な動きを身に付けるような運動遊びを実施することを推奨している。これと連動するように，幼稚園教育要領解説（2019）では，健康な心と体を育て，自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養うことを目的として，いろいろな遊びの中で十分に体を動かすことや進んで戸外で遊ぶことを推奨している。

賀川ら（2003）は，小学校高学年を対象として体育授業と運動有能感との研究において，体育の授業では，児童に「運動有能感」をもたせることが重要であ

ることを報告している。幼児期においても運動ができることに自己肯定感を感じ，それが心身の成長に繋がっていると考えられる。それゆえ，幼児の心身の成長を促すには，成長・発達段階を考慮した系統的な体育遊びの指導法が必要であるといえる。

しかし，先に述べたように実際の指導現場では，多くの教育者が「幼児体育」の指導に特化しておらず，運動遊びや器械運動に指導不安を抱えている実態があり，上記したような幼児の心身の成長を促す指導が適切に行えていないと考えられる。保育者養成課程としては，学生が抱える指導不安を取り除き，より効果的な指導方法をもって確かな保育実践力を身に付けさせる方法を考案することが求められよう。

国内での幼児を対象とした運動遊びの教材に関する研究は増加しているが，保育士・幼稚園教諭，あるいは幼児体育指導員を目指す学生自身を対象とした研究事例は少ない。そこで本研究では，保育者養成校の幼児体育コースの学生を対象として，指導案を作成することを通して，学生が不安や困難に感じている内容を明らかにすることにより，問題点や課題を考察することが目的である。

Ⅱ．方法

１．対象者及び調査時期

（１）対象者

Ⅰ大学１年次開講「幼児体育指導法Ⅰ（器械運動）」履修者17名とし，有効回答を得られた16名を分析対象者とした。分析対象者は男性８名，女性８名だった。

（２）時期

2019年７月の幼児体育指導法Ⅰ授業内に実施した。

２．調査内容

（１）アンケート調査

室井ら（2018）が行った「指導案に関するアンケート調査」を参考とし，指導案作成前と模擬授業終了時である指導案作成後の２回実施した（表１）。回答は「そう思う」を４点，「やや思う」を３点，「あまり思わない」を２点，「思わない」を１点とし，それぞれの小カテゴリーごとに得点化し，平均値を算出し，グラフ化した。

男女差は，それぞれの小カテゴリーごとに得点化し，平均値を算出した。小カテゴリーごとの得点を，困難感として捉え，得点が高い方を困難感が高いとした。

（２）調査手順

指導案作成にあたり，男女混合で３～４名のグループを作成した。この際，学内で実施されている学力テスト[iii]の総合得点の平均値が各グループ間で均一になるようにグループを構成した。

模擬授業の場面設定は１回30分とし，跳び箱の開脚跳びもしくはマット運動の前転から選択し，グループで指導案を作成し，模擬授業を行った。このとき，指導者役を３～４名とし，子ども役を５名以上とした。

体育館を２面に区切って２グループが同時に模擬授業を行った。模擬授業後には指導者役と子ども役の両者とも振り返りシートに記入した。調査スケジュール

表１　指導案作成に関するアンケート

		そう思う	やや思う	あまり思わない	思わない
子ども理解	子どもの姿を考える				
	子どもの発達を考える				
	年齢に応じた活動を考える				
指導援助方法	ねらいを設定する				
	活動の導入方法を考える				
	活動の展開を考える				
	環境構成を考える				
	援助の留意点を考える				
	適切な言葉がけを考える				
	時間配分をする				
記述	文章を書く				

は図１に示した。

図１　調査スケジュール

３．倫理的配慮

アンケート実施にあたり，回答内容及び回答の有無は成績に影響しないことを説明した。また，取得したデータは研究以外には使用しないことを説明し，調査対象者全員の同意を得た上で回答を求めた。

Ⅲ．結果と考察

１．困難感の得点

図２～４は得点化した困難感をグラフ化したものである。

「子ども理解」では，指導案作成前から指導案作成後で困難感が増加した。「子ども理解」の全３項目において，指導案作成前から指導案作成後で困難感が増加していることがみられる（図２）。

特に「子どもの発達を考える」では，最も点数が増加しており，発達段階に応じて指導することが難しいと捉えた学生が多いことが考えられた。これは，本授業が１年次に履修する科目であり，この時点では学生が子どもの発育発達段階を習得できていないため，戸惑いが見られたと推察する。

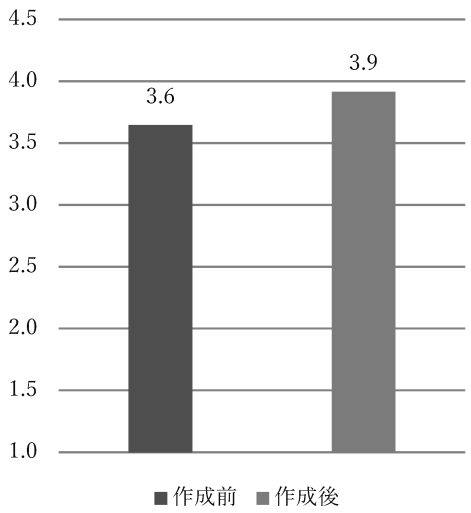

図２　子ども理解

「指導援助方法」では，指導案作成前から指導案作成後で困難感が増加した（図３）。全７項目中６項目において困難感が増加しており，特に「時間配分をする」においては，指導案作成前では全項目で最も低い値であったにもかかわらず，模擬授業終了後の指導案作成後では，指導援助方法の項目のうちで最も高い値を示している。時間配分をすることに困難感を持っていなかった学生が，実際に指導案を書いて模擬授業をすることで，困難感を感じている。振り返りシートにおいても決められた時間を使って運動指導することについて反省点が上がっている。

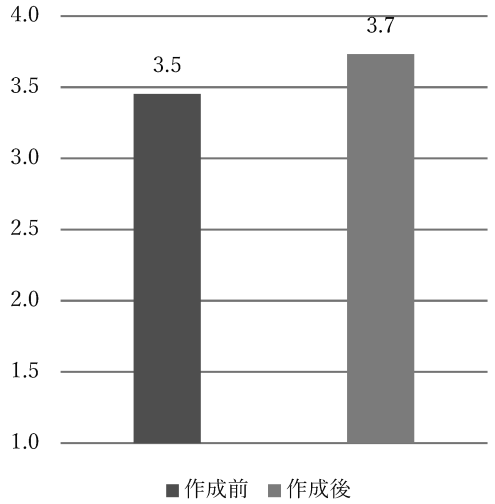

図３　指導援助方法

「記述」に関しては，指導案作成前より指導案作成後で困難感が減少した（図４）。本時では，運動の一場面の指導に関して文章で表現することにより，指導中の自らの言動についてあらかじめ認識していたため，困難感を感じなかったと考えられる。桐川ら（2019）は，指導案作成につながる文章表現力を育成するには，実習記録や指導案の指導に先立って，「日本語表現」などの文章表現関連科目において，基本的な文章表現の知識・技能を養うことが必要となってくるとしている。実際の実習における指導案を書くことは，基本的な文章表現が身に付いている学生であっても難しく，若尾ら（2015）は，「学生の基礎学力の欠如」や「学生の理解力の欠如」などを原因として挙げている。つまり，基礎的な学力を充分に身に付けていない学生は，今後，実習で指導案を作成する時には，文章を書くことに対する困難感が増加すると考えられる。

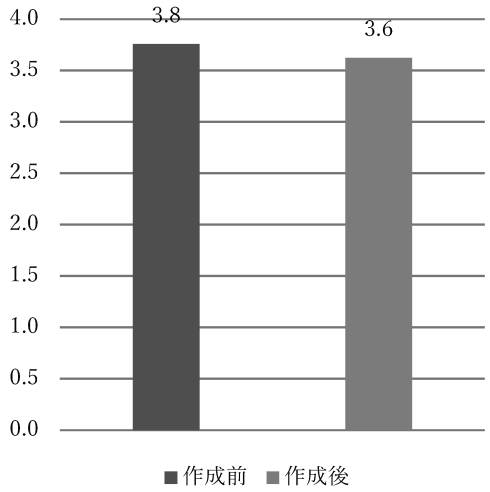

図４　記述

２．男女の特性

表２は，困難感を小カテゴリー化し，その平均値を算出し男女差を示したものである。

表２　小カテゴリーにおける男女の特性

	作成前		作成後	
	男	女	男	女
子ども理解	3.7	3.6	3.9	4.0
指導援助方法	3.6	3.3	3.7	3.8
記述	3.9	3.6	3.8	3.5

子ども理解，指導援助方法の２項目において，指導案作成前より指導案作成後で女子は男子より困難感が増加している。一方で男子では減少傾向がみられる。グループは男女混合であるのにかかわらず，女子のみ困難感が増加している原因として，女性は子どもと関わることが得意であると考えている傾向がある。これは，役割分業意識の名残で保育・育児は女性特有の役割であったことや，役割達成感と女性の生活満足感が相互作用すること（土肥ら，1990）が理由としてあげられる。反対に男子は，指導案作成前では子どもへの指導不安を抱えていることが考えられる。

表３はそれぞれの困難感の平均値を算出し男女差を示したものである。女子において特に増加したのは，「活動の展開を考える」項目であり，運動の展開を考えることの困難感が表れている。活動の展開を考えるためには，子どもの発達を理解できていなければならない。こうした対象への理解が不足しているために，「子どもの発達を考える」項目が，指導案作成前後のどちらにおいても困難感が高値を示したことに影響を与えたと考える。

また，「活動の導入方法を考える」「環境構成を考える」の２項目においても，指導案作成前から指導案作成後で困難感が増加している。これは，実際の現場でのイメージが必要になってくるが，「子どもの姿を考える」項目でも増加していることから，運動指導する場面で幼児の姿を正確に捉えることが今後の課題であるといえる。

表３　困難感の男女の特性

	作成前		作成後	
	男	女	男	女
子どもの姿を考える	3.6	3.5	3.8	4.0
子どもの発達を考える	3.7	3.8	4.0	4.0
年齢に応じた活動を考える	3.8	3.6	3.9	3.9
ねらいを設定する	3.6	3.1	3.4	3.4
活動の導入方法を考える	3.9	3.5	3.8	3.9
活動の展開を考える	3.8	3.3	3.9	4.0
環境構成を考える	3.3	3.4	3.4	3.9
援助の留意点を考える	3.7	3.4	3.6	3.8
適切な言葉がけを考える	3.7	3.3	4.0	3.5
時間配分をする	3.3	3.3	3.9	4.0
文章を書く	3.9	3.6	3.8	3.5

斉藤ら（2008）の調査においても，５割から６割の学生が実践時における困難な項目としてあげている項目が，「実践時の個々の幼児に対する対応と集団の把握」と「活動の導入方法」であることであった。模擬授業の場面では，同年代の学生が子ども役を行うため，現場をイメージすることが困難である。子どもの興味を引きだすため導入，幼児の行動を予測し，臨機応変に対応すること，幼児個々との関わりと集団の動きの把握等は，模擬授業だけではなかなか体験できない部分がある。今後，実際に現場へ出て幼児と関わり，様々な体験を積み重ねることや，大学の授業においても，本授業で取り入れた模擬授業のように，実際の保育場面を想定した授業内容を充実させることは，解決策の一つとして考えられる。また，運動の楽しさを伝えるためには，幼児が思い切り身体を動かすことのできる教材を提供することや，運動に適した環境構成が必要なため，今後どのように指導不安に対する困難感を減少させるかが課題である。

今回の調査では項目間に関連性があることが推察される結果となったが，それを裏付ける充分な調査ができなかった。今後は今回の調査に使用した項目間の関連があることを前提にして，それを裏付けるような調査をすることで，困難感の内実が明らかにできると考える。

引用・参考文献

1）土肥伊都子，広沢俊宗，田中國夫（1990）「多重な役割従事に関する研究－役割従事タイプ，達成感と男性性，女性性の効果－」社会心理学研究第５巻第２号：137-145

2）賀川昌明，横田直樹（2003），「小学校高学年児童の自尊感情と体育授業における価値観及び運動有能感との関連」鳴門教育大学研究紀要（生活・健康編）第18巻：９-18

3）桐川敦子，室井眞紀子，目良秋子，松崎史周（2019）「指導案作成における学生の課題 －保育者養成短期大学の学生を対象として－」日本女子体育大学紀要第49巻：59-64

4）文部科学省（2012）「幼児期運動指針」

5）文部科学省（2019）「幼稚園教育要領解説」

6）室井眞紀子，桐川敦子（2018）「指導案作成時に学生が感じる課題意識 －映像視聴前後の変化についての検討－」帝京短期大学紀要No.20：43-50

7）大野木裕明，宮川充司（1996）「教育実習不安の構造と変化」Japanene Journal of Educational Psychology，44，454-462

8）斉藤葉子，大木みどり（2009）「実習の事前・事後指導に関する研究（Ⅵ）－教育実習Ⅱの責任実習における保育計画及び実践の問題と課題－」羽陽学園短期大学紀要 第８巻 第３号（通巻29号）：362-378

9）若尾良徳，桐川敦子，目良秋子，岡部佳子，佐藤有香，後田紀子（2015）「保育者養成課程の講義科目における授業の課題および授業方法の実態－保育者養成課程の教員へのインタビュー調査－」養成課程研究会紀要第１号：27-40

10）山口莉奈，正田悠，鈴木紀子，阪田真己子（2017）「体育科教員のダンス指導不安の探索的研究」日本教育工学会論文誌41（２），125-135

---

[i] 保育士と幼稚園教諭どちらも保育者として記す。

[ii] 実際の指導現場において「運動遊び」や「幼児体育」に関する指導不安について申請者２名が聞き取りを行った。2019年６月５日岡山県Kこども園にて実施。「保育者が遊びを提案できない。」，「運動遊びを発展させる方法がわからない。」，「日常の保育中の少しの時間に取組める運動遊びの方法が知りたい。」という声があがった。

[iii] 就活学力テスト®